



株式会社ウェイテクネット



戦後の日本農業は食糧増産重視の考えで、多量の化学肥料・農薬による農業といっても過言ではありません。合わせて食の欧米化に伴い、日本の食文化は大きく衰退しました。その影響で従来「成人病」といわれた壮年期以降に発症していた糖尿病、高血圧、癌などが、最近では子ども達に迄及んでいます。名称も「生活習慣病」となりました。

今、消費者・食流通関係及び、飲食店関係者からも「食の安全・安心」への関心と要望はより強くなりました。また、各地では「日本人にとっての食のあり方」についての議論も高まり、行政も積極的姿勢を見せ動き始めました。

農薬や化学肥料を使わず、土や水、空気に含まれる好気性微生物や自然界に存在するミネラル、エネルギーなどで作物の生命力を最大限に引き出す栽培方法を行い、各資材関係も「大地の子」シリーズとして生産し、持続性の高い農業生産を推進してきました。

私たちは地球に養い育てられました。私たちは地球とともに「美しい国日本をつくる農業」を、そして「健康で美しい子孫を育む」ための活動を、今日から、いまから推し進めなければなりません。明確な展望を持ち、将来にわたる確かな農業戦略をもつ時期です。

国の施策も「農地・水・環境保全向上対策」「有機農業推進法」など環境保全に目を向けて打ち出されています。私たちは、誰もが心安らぐ環境の中で、資源の無駄遣いをしない本来の自然農法により、消費者の要望に十分応えられる生産・流通が無理なくできるのです。そのためにも私たち生産者が地球とともに、大地とともに生きるという認識と誇りを持って取り組んで行く事が重要なことだと思います。

21世紀は、食と環境の時代といわれています。「生産者・流通・販売」と言った一連の流れを、同じ考えで研究開発し社会貢献できればと考えます。

e 大地 農法とは

我が国農業は、戦後「質」より「量」に主体を置き、化学肥料、農薬、除草剤、などを永年施用してきた、その結果として残留性の強い化学物質が土壌中に蓄積し、これら化学物質は分解が難しいことから環境を汚染しているのが実態と言える。

昨今、農業の永続的発展のために、地球環境を保全する農業、いわゆる有機農業、減農薬農業、特別栽培農業など様々な形態で取り組まれているが、これら全ての農法の基本は、有機物を化学肥料の代替と考えとした考えに他なりません。

「e 大地農法」の基本的な考えは、土壌その物と植物の持っている生命力をどの様に活用し、完全なる無化学肥料・無農薬によって作物を生育させていくことを基本的な理念に掲げている点にあります。

その場合一般的に有機質はその分解過程で土の中の酸素を消費するので、作物の生育を阻害すると共に、分解の時に発生するアンモニアやメタンガス、有機酸等も発芽や生育に障害を起こす原因となり、また有機物を好む害虫の発生も呼び起こします、また窒素過多に成りやすく、硝酸窒素分の多い作物が収穫されます。

数年前から、「土壌と植物」の因果関係を研究し、土壌類菌の中で、好気性微生物と嫌気性微生物のバランス、しいては、ミネラル元素の重要性に着目し、ようやくその商品の工場生産化に成功しました。

この資材は、好気性微生物をバーク・藻などに培養吸着させ、30L袋に詰め「大地の子」として命名し、販売しております、またあらゆる生命体はミネラル元素が不可欠である事に着目し、この資材も「大地のミネラル」として販売しております。

この2つの商品をバランスよく使用することにより、無化学肥料・無農薬栽培を行い、「食味」と「生産量」を確保し、出荷時には200品目の残留農薬検査を行い、生産者としての責任を負う工法です。

大地の子の特徴

植物が必要とする基本的な栄養素は、窒素・リン酸・カリなどの化合物です。各種の栄養肥料の殆どは有機化合物でそれ自体では植物は吸収できません。

では、何故吸収するようになるのでしょうか。それは、一般の土壌にいる好気性微生物が有機物を無機質に分解して(窒素化合物から化合物を分解し窒素だけの無機質だけ残す)植物が吸収できるようにするのです。

今までの農業では、肥料関係の知識は教えていましたが、肥料がどのように植物に関係して吸収されるかまでは教えていないようです、其処に現在の問題点が有るように思われます。

どれだけ化学肥料をやっても、それが有機物を分解する機能がなければ、植物は栄養として吸収できないのです。

化学肥料を大量にやると、土壌に生息している好気性微生物は盛んにそれを餌とし繁殖します。好気性微生物が繁殖するには大量の酸素が必要です、然し土壌を満足いくまで攪拌する事はなかなか困難です。その事により元々いた好気性微生物が死滅し、嫌気性の菌が発生する事になり、土壌がやせて生育を妨げ、更に色々な病気を発生させる結果となります。

大地の子には、河川の浄化・油分分解・工場廃液浄化・etc など20数年に及び実績のある、好気性微生物を効率よく、バーク資材その他に繁殖培養し、また天然鉱物(石墨片石・緑色片石)のミネラル微量元素をブレンドしております、この事により下記のような特徴が有ります。

- ・ 微生物の増殖富化は、必然的に根圏を清浄化して、根の障害を軽減化すると同時に、無機物や有機物の分解を進め、それらの成分の吸収を旺盛にし、根の生育を促進します。
- ・ 微生物の増殖は、菌体の分泌物などの良質の動物性の窒素や、ホルモン類を芝草の根に供給しますので、土壤微生物の豊富な芝地はそれなりに、植生の生育が好転いたします。
- ・ 有害菌に対する免疫力(静菌作用)の増進による耐病性の向上は、減量した農薬・化学肥料での栽培管理のもたらす労力と、時間の省力化に大きく貢献いたします。
- ・ 地球規模でのCO2削減に大きく貢献いたします。
- ・ 窒素分を速やかに分解し、硝酸態窒素分を削減します。

天然鉱物の土壌改良資材 「大地のミネラル」

『大地の宝物』は商品名であり、株式会社日本鉱物化学研究所(全国土壌改良資材協議会会員)で製品化された鉱物質土壌改良資材です。

原料となる鉱石は日本で最も古い地層の秩父系古生層小佛統を含む山梨県東北部周辺より採石される石墨片岩等を母岩とする断層粘土の集合体である鉱石です。

これを選鉱・乾燥後、ジョークラッシャーで粗砕、必要に応じて2段ロールクラッシャーで中砕、特殊なフレットミルで微粉碎し『大地の宝物』となります。これに糖蜜を加え平板法により粒状化したものが粒状品です。これは土壌水により容易に分解します。

造岩鉱物組成は石英・長石・斜長石が主体で他に方解石・絹雲母・黄鉄鉱・チタン石・磁鉄鉱・硫磁鉄鉱・石墨・緑泥石や粘土鉱物(X線回析)としてイライト・クロライトが主に認められます。これら粘土鉱物はあとから述べる微生物作用に深く関わっております。

昭和28年3月、丸木長雄氏(元東京農業大学三鷹農業長・大日本農会より褒賞)を中心に全国の篤農家グループ(みつち会)で、水稻・蔬菜・果樹等、作物全般について試験施用を開始しました。初年度より増収・品質向上等、著しい効果が認められ、以降試験グループの増員に伴い様々な施用方法が試みられました。その結果、多肥栽培や連年施用において効果が更に向上するとともに植物の耐病性を高める効果が確認されました。

昭和40年代に入り漸く有識者の注目を浴び、作物関係においては東京農業大学。金木博士・米安博士、土壌関係においては東京農業大学・故横井博士、東北大学・故増井博士、山梨県農業技術研究所・夜久博士により効果を認められ、各地の農業試験場等において各種作物に対する効果確認試験を実施致しました。結果は何れも他に例を見ない高品質・高収量の成績を示しており、『総合ミネラル宝素成績集』に詳細にまとめられています。

天然鉱物の土壌改良資材 「大地のミネラル」

『大地の宝物』は商品名であり、株式会社日本鉱物化学研究所(全国土壌改良資材協議会会員)で製品化された鉱物質土壌改良資材です。

原料となる鉱石は日本で最も古い地層の秩父系古生層小佛統を含む山梨県東北部周辺より採石される石墨片岩等を母岩とする断層粘土の集合体である鉱石です。

これを選鉱・乾燥後、ジョークラッシャーで粗砕、必要に応じて2段ロールクラッシャーで中砕、特殊なフレットミルで微粉碎し『大地の宝物』となります。これに糖蜜を加え平板法により粒状化したものが粒状品です。これは土壌水により容易に分解します。

造岩鉱物組成は石英・長石・斜長石が主体で他に方解石・絹雲母・黄鉄鉱・チタン石・磁鉄鉱・硫磁鉄鉱・石墨・緑泥石や粘土鉱物(X線回析)としてイライト・クロライトが主に認められます。これら粘土鉱物はあとから述べる微生物作用に深く関わっております。

昭和28年3月、丸木長雄氏(元東京農業大学三鷹農業長・大日本農会より褒賞)を中心に全国の篤農家グループ(みつち会)で、水稻・蔬菜・果樹等、作物全般について試験施用を開始しました。初年度より増収・品質向上等、著しい効果が認められ、以降試験グループの増員に伴い様々な施用法が試みられました。その結果、多肥栽培や連年施用において効果が更に向上するとともに植物の耐病性を高める効果が確認されました。

昭和40年代に入り漸く有識者の注目を浴び、作物関係においては東京農業大学。金木博士・米安博士、土壌関係においては東京農業大学・故横井博士、東北大学・故増井博士、山梨県農業技術研究所・夜久博士により効果を認められ、各地の農業試験場等において各種作物に対する効果確認試験を実施致しました。結果は何れも他に例を見ない高品質・高収量の成績を示しており、『総合ミネラル宝素成績集』に詳細にまとめられています。